

令和8年度 安全だより



令和8年6月19日発行

○令和8年度・事故発生状況について

傷害事故2件(賠償0件)の事故が発生しました。

6月10日時点

No.	発生日時・年齢・性別	概要	傷害の程度	起因
1	令和8年4月17日 11時頃 77歳・男性	就業先に到着時、自転車の前輪がグレーチングのすき間にはまり右に転倒した。	手首手指切り傷 擦り傷 ・通院	自転車
2	令和8年5月10日 6時20分頃 65歳・女性	就業先の施設入口に向かって歩いていたところ、後ろからカラスに襲撃されたため逃げようとしたところ転倒した。	頭部・顔(目鼻口耳喉を除く)指切り傷 擦り傷・通院	鳥

カラスの繁殖期(3月～7月)は、巣やヒナを守るため警戒心が強く、また、特にヒナの巣立ちする6～7月は、親ガラスの攻撃がもっとも高まります。巣がありそうな場所では、頭上を見上げず、走らずに、静かに距離を保つことが安全対策になります。



○梅雨型熱中症とは？

夏本番を迎える前に起こる「梅雨型熱中症」という言葉も聞くようになりました。真夏ほどの気温ではなくても、湿度が高ければ起きやすく、風が弱い日にはさらに発症しやすくなります。かつて梅雨は涼しい日が多かったのですが、最近はそうでもありません。真夏の熱中症との違いは、真夏の方が大量の発汗と高体温で救急搬送されることが多く、炎天下で起こるため、熱中症を疑うのは容易です。

一方、梅雨型の熱中症は、知らず知らずのうちに発症し、じわじわと静かに進行するため、本人も周囲も熱中症と気づきにくいことです。

湿度が高いと汗が蒸発しにくく、体内に熱がこもり体温が上がりやすくなるため、身体は体温を下げようと発汗するため脱水が起こりますが、湿度が高いとどの渴きを感じにくいため、水分補給がおろそかになり、脱水症状が進みます。しだいに体温の調節機能が弱まり、熱をさげられなくなり、“体温上昇”と“脱水”が組み合わさることで熱中症が引き起こされます。

○熱中症処置のフロー図について

熱中症かな？と思ったら...

～熱中症のおそれがある人を発見したら～

就業先で会員自らが熱中症かなと思ったら、又就業先で他の会員に症状が疑われた場合は、次のフロー図の処置を優先したうえ事務局へ報告してください。

熱中症を疑う症状がある

【症状例】めまい、筋肉痛、筋肉の硬直（こむら返り）、頭痛、吐き気
ふらつき、失神、大量の発汗、けいれん、倦怠感、高体温

現場責任者又は周囲の人に申し出る
作業離脱（涼しい場所へ避難）
身体冷却（衣類をゆるめる）
※水分補給（経口補水液など）

※呼びかけへの反応が悪い場合は無理に水を飲ませない。

